

発行所 読売新聞大阪本社 第1164号 滋賀編集室 〒520-0806 大津市打出浜13の1 電話 077-522-5602, 5507

- 2面 長浜の「すすく広場」
3面 児童らはつらつ・うちの天使
4面 キラキラすぼと「旬」の人々

命のバトン渡す

写真家、ジャーナリスト 國森康弘さん 38

世界の戦闘地帯を取材してきた写真家、ジャーナリストの國森康弘さん(38)(大津市青山)が、2010年秋から自宅での「穏やかな死」をテーマに写真を撮り、2012年に4冊の写真絵本集として出版した。「死は終わりでも敗北でもなく、命のバトンを次の世代に渡すこと」と実感している。



「子やもつに、命について考えるきっかけにもなれば」と絵本を手にする國森さん

兵庫出身の國森さんは、大学卒業後地元新聞社に就職。2003年に独立し、東アフリカのソマリア連邦共和国やイラク、スーダンなどの戦闘地帯を取材で奔走した。同時に第2次世界大戦を経験した日本の高齢者への聞き取りも始めた。日本の戦争についても今、聞いておかなければならない、と感じたからだ。しかしある時、死と隣り合せて生きていた人の「理不尽な死」ばかりを聞いていることに気が付いた。

看取り撮り続け4冊の本に

10年秋、東近江市永源寺地区で訪問診療を行う医師、花戸貴司さん(42)に同行し、自宅での看取りの取材を始めた。「同市甲津畑町で出会ったのはひいばあちゃん、と暮らす小学5年生の女の子、恋ちゃん。ばあちゃんが大好きで、寝ている手を握り、学校での出来事を語って聞かせる。やがて、ひいばあちゃんは天寿を全うするのであるが、その瞬間の恋ちゃんの顔を見たとき、我が子の誕生の間と似た感情を抱きました。本当に厳かだった」



「恋ちゃん はじめての看取り」の1ページ

約一年半かけて医師に密着、地域の信頼を得てシャッターを切り続けた。取りためた写真はのどかな周囲の風景を含め、1万枚を超えた。12年冬、それら

毎週火・金曜日

生きる意味伝えたい

医療福祉・在宅看取りの地域創造会議



「医療福祉・在宅看取りの地域創造会議」のメンバー



11月に行われた劇「また逢う日まで」の一場面

90団体200人 医療、介護の態勢作り

取りや終末期医療についてみんな考えるきっかけを作れないか、と話し合ううち、会員の1人から「私たちの体験や思いを盛り込んだ『看取り劇』を作ってほしい」というアイデアが出た。賛同した会員らで昨春秋に劇団を結成した。劇の脚本を担当したのは、会員で栗東市介護者の会代表の小林純子さん(64)(栗東市霊仙寺)。「勉強会で得た知識だけでなく、会員同士の雑談などで聞いたそれぞれの体験談にこそ、強いメッセージがある」と考え、2か月かけて看取り劇場「また逢う日まで」の脚本を書き上げた。

劇は約30分間のDVDにまとめられ、今春にも県内関係機関や市町の担当課に届けられる予定。同会議のメンバーは「人生の最期をどこでどんな風に迎えるか、家族や身近な人と相談することの大切さに、ぜひ気づいて」と呼びかけている。劇のDVDや同会議への問い合わせは県医療福祉推進課(077-5280-3520)へ。

最期の日々 自宅で

自宅で最期の日々を過ごしたい。そんな希望がかなう世の中にならうと、県内の医師や看護師、福祉医療従事者、自宅で家族を介護する当事者らが団体を設立、終末期医療をテーマにした劇を上演するなど、在宅医療や自宅での看取りへの意識を高める取り組みに力を入れている。

2012年夏に県が行った「医療福祉に関する県民意識調査」では、回答者の約48%が自宅で最期を希望。しかしその半数以上が「実現困難」と回答している。在宅医療や自宅での看取りについて取り組んでいるのは「医療福祉・在宅看取りの地域創造会議」(代表幹事・笠原吉孝県医師会会長)。関係機関や団体、個人が連携し、地域で生活と医療、介護を支えられる態勢作りを目指して11年8月にできた。設立時のメンバーは71団体と個人会員80人余りだったが、12年末には団体が90弱、個人会員は200人を超えた。在宅医療や福祉の勉強会で、看



会議では、県内の終末期医療について熱い議論が交わされる

体験基に看取り劇上演

時の思いを語り合う、というもの。「その世」では1人の高齢者が自宅で家族に看取られながら旅立つ様子を描いた。小林さんは「自分の言葉で演じられる内容」と出演者の実体験を交えながら書いた。11月に大津市で開かれた「滋賀の医療福祉を守り育てる県民フォーラム」で上演。家族の死という

